

海月ノート



2012



海月ノート 2012

学びの場を支える仲間のために
テーマ「ことば」

はじめに

1. どうしてことばをとりあげるのか。
2. 何のためにことばを使うのか。
3. ことばが世界を作ってしまうことの実感を持つ。
4. 「伝える」と「話す」を区別する。
5. 自分のことばが聞こえているか。
6. 360度の真ん中でことばを扱う。
7. 語らないことへの信頼

さいごに

今回は付録つき

1. どうしてことばをとりあげるのか。

はじめに (海月ノートについて)

大切だと思うことを、伝えたいと思うかたちで伝えるものとして昨年からはじめた海月ノート。わたしがベースとしているラボラトリーメソッドについて説明した「小海月ノート」3冊を入れると、わたしの手作り小冊子は、これで5冊目になります。そして、今回「海月ノート2012を書く」というスイッチを自分の中で入れてから、何を書こうかということはずっと考えていました。…書きたいことはたくさんあるような気がしたからです。

例えば、日々、フェイスブックやツイッターなどを流れていく、学びや教育や場づくりや対話についての多様な言説や思いや価値観が引き金となってわたしのなかで沸いてくること。誰かのつぶやきに、あれ?と思ったり、誰かの投げかけともつかないことばの書き連なりに、そうなのか?と問いたくなったりすること。流れてくる他人のことばのいちいちに、日々の細事を奪われたくない思いから、コーヒーのひとくち、誰かの鼻歌、ごぼうの千切りを優先して、そのままになっているそれら。

それらを集めて編集する...というのはどうだろう。そんなことを一度思ったのです。うん。そうだそうして書いてみよう...、とそんなことを思いながら、キッチンに立ちお皿を洗いながら、次に思ったのは、やっぱりそれは出来ないな、ということ。

わたしが自作の小冊子の中でしたいと思っていることは、今わたしがつながらている人達が求めていることに対して近づこうとすることではないからです。今、このわたしの目の前を行き来することばたちに、わたし自身が誘発されて何かを語り出すことではなくて、わたしがこれまで通ってきた道筋の中で、わたしを育ててくれた人達からわたしがもらったものを伝えること。それが、わたしがわたし自身に課したことで、海月ノートシリーズを書こうと思った原点です。

わたしがしたいことは、かつて生まれ、あり、かたち作られ、伝えられてきた、人間のある種の知恵のかたちを、わたしが出来る最善のかたちで伝えること。実際にどのくらい出来ているのかは分からないけれど、でも海月ノートはそういうものです。

ということで、はじめたいと思います。



今回は、ことばのことをテーマにします。
まずは、その理由からおはなししたいと思います。

ことばは「迷路好き」です。まっすぐにゴールを目指せばいいのに、ちょっとした脇道、ちょっとした扉なんかに興味を示します。

ことばは、たぶん、狭いところが好きです。気にしても仕方がないのに、気になるから、と小さな穴をのぞきます。

ことばは目立ちたがり屋なので、話し手を出し抜いて、すぐに前に出ようとします。話し手がいてはじめて、世に出られるはずなのに。

そして、ことばは、ことばとすぐに仲良くなってしまいます。ことば同士が関心を示し出すと、自分のもとへ連れ戻すのは、ちょっと大変。

ことばは、こんなふうにもともと話し手を困らせる性質を持っています。話し手からかんたんに離れて、ひとり歩きたり、生みの親であるはずの話し手を従わせようとします。それらは、自分が言ったことと伝わったことが違う、とか、あんなこと言わなきゃよかった、といったかたちで多くの人が経験していることです。

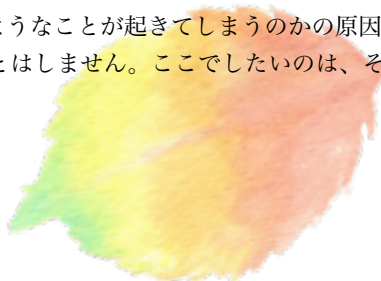
さらに、やっかいなのは、ことばは「わたしは他人よりもすぐれている」とか「わたしは他者よりも有能である」ということを示すのにとっても便利という点です。

ことばは、私たちが生きる社会を成立させるのに欠かせないものです。道路を造るのも橋を架けるのも、貿易をするのもすべてことばというものがなければなすことができません。そのせいで、より多くの単語、構文を組み合わせ、複雑なことば扱いの出来る人、よりすばやくことばを書いたり話したりできる人のほうが、他者よりも多くの報酬を得たり、自分に利点の多いシステムづくりをすることができます。また、ことばは、困っている他者を助けたり、支援したりするのにも使うことができますから、ことばによってより多くの人を助けたり、励ましたりできると、やはり人よりも秀でているとか、すぐれているといった印象を与えることができます。「本当に人の役に立ちたいと思っている人のことば」と「たくさん人の役に立っている人だと思われたいと思っている人のことば」は、文字や音声だけでは、正直見分けが付きません。（そんなことを言うと、この毎月ノートも怪しくなってしまうのですが・・・）

もちろん、ことばの一人歩きや、ことばの持つ力の掛け合いが生み出す豊かな文化も、わたしたちにとっては大切なものです。効率や合理性や自己の優位性やそういったもののために使用することばを否定するつもりもありません。今あるわたしたちの世界は、すべてことばなしには成立していないのですから。

ですが、それは、人と人が関係を結ぶという面においては、違う見方、違う使い方が必要です。難しいことばは、それが分かる人にしか通じません。むしろ、それは難しいことばを使わない人が、自分が優れていないという気分を持つ原因になったりします。細かいことはどうでもよくて「あなたのことが好き」と言ってくれれば仲良くなれるのに・・・と話し手の回りくどさに困ってしまう聞き手も生まれるでしょう。

ここでは、なぜそのようなことが起きてしまうのかの原因を掘り下げたり、検証したりすることはしません。ここでしたいのは、そういうことではないからです。



ただ、ことばは、おそらく「教育」という人間の活動においては適切に使いこなされてこなかった側面があると、わたしは思っています。「教育」は人が育っていく道筋で、他者からどう思われているか、見られているかという認識をつくるのに強い影響を与えるものだからです。ですから、ことばの持つ影響力やその仕組み、そういったことを実感を伴って理解しながら使っていくということは、本来はもっと注意深くなされなければならないことではないかと思えます。

未だ誰も見たことのない未来を作っていく人達に対して使うことばは、おそらく、今まで私たちが使ってきたことばの使い方だけでは不十分です。橋や道路を造るのとは違う、人々を価値付け分類するのではないことばづかい、日々刻々と変化していく人間に向かって使うことばづかい。そういうものにわたしはとても興味があります。そうして、そういったことばづかいがすでに存在していることも体験的には多くの人が理解しているはず、と思っています。

ことばにまつわって必要とされる○○力・・・論理力、説明力、分析力、語彙力、理解力・・・ではなく、ことばの持つやっかいな性質・・・話し手を困らせたり、人よりも優れているという看板を出そうとする性質に惑わされず、生身の人と人がつながりあうことのために、自分自身のことばを使う。これは、今生きている大人の私たちには想像もつかないような未来に生きていかなければならない“これからの人達”が育つ場面を支えていくにあたって最低限求められる作法のようなものだと思います。場づくりとか対話とかファシリテーションと言ったものは未来を志向する人間の活動です。「教育」に分類することができると言って良いでしょう。そこで用いることばへの感性は、どの技術よりも知識よりも日々磨かれ鍛えられていかなければならない、とわたしは思います。

・・・ということで、次の章からはそのために何ができるのか、ということを取り上げていきたいと思っています。

